

経験を語り継ぐ

監修

古宮才由里

太平洋戦争終結から七十五年余りたち、二〇二二年の八月十五日に七十七回目の終戦記念日を迎えます。戦争の記憶が風化しつつある現在、戦争を知らない私たちはあの戦争とどう向き合えばよいのでしょうか。この回では、戦争を語り継ぐ高校生の中から、過去から未来に語り継ぐ方法やその価値を探っていきます。

学習のポイント

- ① 当事者の言葉と語り継ぐ言葉
- ② 様々な立場の相手に伝える
- ③ 戦争を描いた文学やアート

当事者の体験を聞くということ、語るということ

飛鳥さんは戦争体験者に話を聞くことに抵抗がありました。避けることなくきちんと言葉を合っていかなければならないと考え直しました。そのきっかけは、当事者の話の重みと「peace&voice」を立ち上げた高校生小林友香さんの活動に触れたことでした。小林さんの情熱的な聞き方や聞いた話をさらに後輩たちに語る姿にも心を揺さぶられたようでした。番組では、MCの向井さんが「若者」という言葉を例に挙げ、共通点をもつ人々を一括りにとらえることの危うさについて触れました。小林さんは、家族も経験も違う「一人一人の物語」に耳を傾け、当事者の言葉と自分の言葉を区別しながら伝えていこうと決意しています。

当事者の経験を聞くときのポイント、伝えるときのポイント

- ① 当事者を戦争体験者だと一括りにせず、一人一人の固有の物語を引き出す。
- ② 当事者から聞いたこと（事実）は、そのまま伝える。
- ③ 当事者の話に対する自分の思い（感想・意見）を、自分の言葉で伝える。

相手に応じて言葉を選んだり、表現を工夫したりして、伝わる言葉で語り継ぐ

経験を伝えるには、聞き手の立場や状況に応じた配慮や工夫、伝える技術が必要です。聞き手が話に共感し、自分ごととして身近に感じてもらえるよう工夫しましょう。

様々な立場の相手に伝えるときのポイント

- ① 聞き手の年齢や立場に応じて、伝わりやすい言葉や表現を選び、話す順番や話すスピードを工夫する。
- ② スライドなどを活用して、分かりやすく印象に残るようにする。

戦争を描いた文学やアートに触れてみる

戦争をテーマとした表現は、エッセイや小説、絵本、絵画、映画など多岐にわたり、描く内容も、原爆や人間の生存における極限の姿、平和への祈りや模索など様々です。長野県上田市の「無言館」には七百点以上の戦没画学生の美術品が収蔵されています。伊澤洋の「家族」は実像ではなく、一家で団欒するような幸せな暮らしを願って描いた空想画だそうです。

実際に、自分で文学や美術作品に触れてください。戦争を語り継ぐ多様なカタチを通して、あの時代を生きた人々のあり様が確かな輪郭をもって浮かび上がってきます。

エッセイ

受け継ぐということ

古宮 才由里

早朝の人気のない小路を足早に駅に向かっていくと、時折爽やかな香りに気付かされる。その香りに植物のもつ確かな生命力を感じて辺りを見ると、小さな薔薇が風に花首を揺らしていた。丹精された薔薇を見ながら、それを養う人に思いを馳せた。街には、同じ時を過ごす様々な営みがある。改めて、私の穏やかな日常を思い、幸福に感謝した。

今、この街に、戦争の片鱗はひとつも感じられない。しかし、七十六年前には、同じこの地で空襲に慄く人々がいて、それは終戦まで続いた。

番組では「peace & voice」を立ち上げ、戦争を語り継ぐ高校生小林友香さんの活動が紹介された。冒頭では、女性の膝の上に安心して体を預ける可愛らしい女の子の写真が映し出され、私にはその子がしっかりと守られ、愛情深く育てられているように感じられた。小林さんは、幼い頃からひいお婆様に聞いた戦争体験を「語り継いでほしい」と言われながら過ごし、中学校三年生の時にその最愛の人の死を通して、大切な人が亡くなる意味を痛感したという。そして、これらのことを理由に、戦争を語り継ぐ活動を始めたそうだ。

「語る」という言葉は、古い時代に「話す」という意味で広く使用されていたものらしい。私たちは、話すことで時空を越えて広く人とつながることができる。おもしろいことや楽しいこと、ちょっとした不満など様々なことを日常的に話す。日本の古典文学にも人々の話が継承されて現存するものが数多くある。

一方で、話すことは過去の記憶を辿り直す作業でもある。過酷な体験であるほど、聞き手にも話し手にもつらさや悲しみが強いられる。しかし、こういうことを語って聞かせる人がいる。聞き手に対する深い愛情や幸福を願う思いが、個人のつらさや悲しみを乗り越えて「語る」という行為へと突き動かすからだろう。

語ることは体験を話すだけでなく、その人の感情や思いを直接相手に伝えていく。語り継ぐということは、聞き手が話し手の感情や思いを受け取り、新しい別の聞き手につないでいく誠実に掛け替えない行為だ。誰かの思いが時空を超えて多くの人に受け継がれ、幸福な現実を創り出していく。小林さんは同世代の人に戦争体験を聞いてもらって、身近な人に広がることを願っていた。家族から、友達からでも少しずつ。

戦争を経験した人は私の身近にもいた。いつもカッカと高らかに笑い、大事なことは肩を左に傾けて真剣に話した祖父。話さなくても皆の好きなものを黙って知ってくれていた、優しくて朗らかな祖母。二人とも十年前に亡くなった。私が大学在学中に戦争体験を小説にするという宿題が出され、祖父母に取材したことがある。任地でのこと、戦死した兄のこと。その中で「真面目な人ほど」という言葉が、あの時の私を黙らせたのを覚えている。「仲間や家族、国のことを思うからだ。迷った

エッセイ

り、ためらったりしたら自分がやられる。今では考えられないことだが、悲惨だとか凄惨だとか、そういう言葉で片付けられない状況だった。「常に緊張した状態が続き、人間らしい気持ちを保てない戦場で命が前触れもなく断たれていく。生きて勝つことに必死で、判断する余地も自由もなかった当時の状況に、愕然^{がくぜん}として言葉を失ったことを思い出した。

記憶は風化する。大事な記憶は、次に生きる誰かのために守ってやりたい。知ること、伝えるということ。いずれも素直に受け入れる感受性と一握りの勇気が必要だ。意識して、深呼吸して、このことを自分の心に刻み込む。きっとこれが、今の時代の大きな課題だと私は思う。